

KIT NEWS

国立大学法人 京都工芸繊維大学 広報誌
Kyoto Institute of Technology



Vol. 40 2015.11

巻頭特集①

大学改革のうごき

～京都工芸繊維大学の機能強化の方向性～

巻頭特集②

地域創生Tech Programを開設

教育NOW

「映像デザイン論」
デザイン建築学系
池側 隆之 准教授

研究室探訪

基盤科学系
竹井 智子 准教授

繊維学系
麻生 祐司 准教授

がんばる工織大生

活躍する卒業生

タカラベルモンド株式会社
井関 鈴鹿 様

美術工芸資料館収蔵品紹介

妖怪三種

Topics

INFORMATION

京都工芸繊維大学の機能強化の方向性

大学改革のうづき



小野 芳朗 教授 (副学長、KYOTO Design Labラボラトリー長)

本学では、平成24年6月に文部科学省から公表された大学改革実行プランを受け、大学のミッション再定義作業を行い、従来以上に地域や社会への貢献度を高める必要性を再認識しました。

また、平成25年11月に文部科学省において策定された「国立大学改革プラン」を踏まえ、工系単科大学である本学の特色を生かし、大学をあげて様々な事業を推し進めています。前号では大学COC事業・梅檀プログラムをご紹介しましたが、今号は、平成26年度に発足した「KYOTO Design Lab」の活動状況をご紹介します。

KYOTO Design Labの取り組み

建築・デザインを軸に社会改革をめざす

本学は、2014年3月に文部科学省の国立大学機能強化事業の支援を受けて、大学院建築学、デザイン学両専攻を基盤としてKYOTO Design Lab (D-lab) を設立しました。「デザインによる革新」、その「実験場」とも言えます。その目的とするところは、人口減少によって縮小・老朽化する都市の再生と、超高齢化社会の中での人間性の回復です。その課題を、デザイン思考による社会問題の解決 (PBL: Project-based Learning) という形で提起・試行しています。

D-labは大学のシステムを改革する側面も有しています。従来タコツボ様で閉鎖的な大学研究組織に横串を刺すために、工学とデザインの横断的リサーチやワークショップを展開しています。さらに、世界的に知られた文化都市・京都に在るというアドバンテージを活かして、海外の建築・デザインの有数校と交流することにより、教員、学生、事務方の力量を飛躍的に向上させたいと考えています。D-lab効果は大学院入試志望者数に如実に反映され始めています。2016年入学の建築学専攻の大学院入試では、他大学からの志望者が前年比で倍増しました。

さらに一地方国立大学という、いささか地味なイメージから脱皮し、国内や世界に発見されるべくブランディングを実施しています。D-labのロゴは、京都の「見える格子」である東西南北の通りと、「見えない格子」である両側町の斜めの町境の形をモチーフに若手構

成員でつくりあげました。都市の構造を意識した、京都からの発信を表すロゴです。

従来、本学建築学分野では、一級建築士試験の合格者数が国立大学では全国一位の実績を誇ってきました。また、村野藤吾資料の収集と整理・発信でも知られており、実務と研究のバランスがとれた教育機関として評価されてきました。今後は大学院再編 (2014) に続き、D-labの設立による海外大学の教育方法の導入 (2015) と、フォーラー制の導入 (2016) によるユニット誘致とワークショップ開催の確保、そして学生の留学をシステム化していきます。すなわち、よりPBLやリサーチを重視する教育システムへと傾斜することで、さらに即戦力の高い人材を養成しようとしています。



活動状況: 建築

「再生」をテーマにグローバルな共同研究を推進

D-labは2014年度に15か国、30機関から研究ユニットを招聘しました。実施したPBLやレクチャーは40回に及びます。まず、このうち建築に関するプロジェクトを紹介します。建築

は、都市再生、建築設計、構造設計の3つの領域の中で共同研究を実施しています。

およそ建築とはその構造物のみで成り立つものではありません。水や大気、土壌など環境との調和、都市における文脈 (コンテキスト) を理解して成立する一種のシステムです。D-labのテーマの「再生」には、都市の文脈を知るための歴史的検証、ステークホルダーの利害関係の調整、都市空間を創造する要素としてのデザイン性、地球温暖化やマテリアルの再生を視野に入れた仕様など解決すべき課題が満載されています。

2014年秋にはドイツのシュツットガルト工科大学 (Hochschule für Technik Stuttgart = HFT) から8週間に亘り、計8人の建築学教授が来学し、米田明教授、中村潔助教を中心とした共同研究を実施しました。テーマは「中庭のある家」、京町家の再生です。町家に関心を寄せる海外研究者は数多いですが、それは格子状の都市構造とともに、京都を表現する代表的な要素だからです。間口三間で奥行き深い構造と木造、そして格子の連なる都市景観の形成、さらに祇園祭の山鉾や地蔵盆などコミュニティの維持を象徴する町家の並びはまさに、京都です。HFTはこれを単に物理的な再生の提案をするのではなく、異なる専門分野の研究者 (環境、材料、構造、設計、インテリア) が共同して町家の未来像を描き、住みこなすための提案を本学学生とドイツ人学生の混成チームで実施しました。テーマに掲げた領域、都市再生+建築設計+構造設計を横断する大掛かりな共同研究となりました。

食や環境を起点に都市再生を試みる

またスイス連邦工科大学 (Eidgenössische Technische Hochschule = ETH) との関係性を重視し、2015年2月から今まで計6ユニットを招聘しました。3月には素材と構造の革新的な表現で世界の注目を集める建築家ジャック・ヘルツォーク氏 (ETHスタジオバーゼル教授) が学生とともに対話する形のレクチャーを行い、1100人の聴衆が集まりました。



2015年3月23日の講演会「ジャック・ヘルツォークとの対話」

6月にはETHスタジオバーゼルから「食が形作る都市」のテーマで2人の建築家を招いて、エルウィン・ビライ特任教授、岡田栄造准教授、岩本馨講師、三宅拓也助教、長崎陸D-labファシリテーター、中村由香教務補佐員、そして私がアテンドし、建築学とデザ

イン学の院生が参画しワークショップを開催しました。このユニットは世界的規模で「食×都市」の研究を欧州・アフリカで進めてきました。京都を例にとれば、この都市で消費される京野菜は、鴨川水系の水をもとに生産され、京都市中央卸売市場を経て、小売業に流されます。これを市民や料理店が購入し、調理を施し、食卓のぼり、一部は廃棄物となります。この食材を軸にした都市のライフサイクルに注目し、卸売市場と京の台所・錦市場を舞台に共同研究を行う意欲的な試みです。

まず、ワークショップに先駆けて、京都の地理、気候、水、廃棄物、京料理などの一般情報を集めATLASとしてまとめあげました。ワークショップでは、錦市場組合の協力を得て、野菜、豆腐、魚、乾物、湯葉、仕出し屋にお願いして事前調査を実施しました。卸売市場の現地調査と錦市場のヒアリング調査によって、食材の流れを把握し、レポートを毎日作成しては、ETHユニットに夕方批評を受けるワークショップを一週間繰り返したのです。彼らはETH流の編集と分析を丁寧に学生らに指導し、教員の我々にとっても大きな刺激となりました。

また同月にはETH Zürichのランドスケープ研究室が来学し、エルウィン・ビライ特任教授と木下昌助教と共同しました。彼らはさまざまな景観のデジタルデータを採取しており、京都では、町家の庭、喫茶「虎屋」の庭、そして詩仙堂の庭で3Dスキャナーとサウンドレコーダーで記録しました。折からの梅雨時、庭の土に下(した)しるしめやかな雨音を採取し、雨が上がると梢に啼く鳥の声を10日間に亘り記録しました。いずれも本学の建築学とデザイン学の学生が参加しましたが、日本の建築学教育と全く雰囲気異なるアプローチに強く刺激を受けたようです。



錦市場における調査、ヒアリングを実施しました。写真は、ETHスタジオバーゼルのマニュエル・ヘルツ氏 (現バーゼル大学教授) と本学大学院生。

都市の文脈を探る試み

ETHの2つのユニットは何をしていたのでしょうか。それは都市の「文脈」(コンテキスト) を探しにきていたと私は考えています。京都という都市の文脈を理解するためのツール、それが「食」であり、「音」です。「文脈」を理解することは、建築的な都市デザインに生かすことはもとより、たとえば京料理や京菓子を世界にアピールするための企画をデザインし、京都のアドバンテージを世界に発信す

ることも考えられます。都市の構造や文脈の研究が、ブランド力を付加したクールな京都の発信という、一種の起業を促す事業開発にもつながるのではないかと期待しています。

ETHからの来学は、7月の祇園祭の宵山・巡行のタイミングで来日した建築家のアネット・ギボン教授とマイク・ゴヤー教授は、その調査と、本学建築学のジュリーのクリティークを務め、彼らの帰国をもって、一連のワークショップは夏休みに入りました。この秋はいよいよETHの「食が形作る都市」ワークショップの都市デザイン作業が始まり、また同じくETHの庭の映像と音をもとにランドスケープの設計が企画されています。

これらの成果は出版に加え、D-labが東京に有するギャラリー（秋葉原のアーツ千代田3331の203）でも展示、公開を予定しています。将来的にはスイス・バーゼルVitra展示場での展覧会の開催も視野に入れています。



東京・秋葉原にあるKYOTO Design Lab東京ギャラリーでは、D-labの成果を中心に企画展を通じて情報発信に努めています。入居する「アーツ千代田3331」は、千代田区の中学校をリノベーションした複合芸術施設で、現代アートのギャラリーやデザイン事務所が入居しています。

活動状況: デザイン

デザインによる人間の「再生」

デザイン分野におけるD-labのミッションもまた、「再生」を強く意識して、社会的課題に応えようとしています。超高齢化社会が到来するなかで、過疎地の農村で暮らす人々のためにデザインすべきものは何なのか。介護を要する人と介護に携わる人の困難に対しどのような解決法を見出すべきなのか。モノに満ち溢れた社会で廃棄物となるものをどのように価値を付加した形で再生すべきなのか。「再生」をキーワードにしつつ、社会を形作るデザイン、つくる行為と素材の再定義、批評的キュレーションという3つのテーマを設定しています。

社会的関係性のデザイン

ユーザー視点からの洞察と実践的デザイン方法論を立ち上げ、革新的ソリューションを与えること、それが社会的関係性を謳うデ

ザインの目的です。この活動は、プロダクト、サービス、コミュニケーションを横断する領域にまたがり、社会の未来を豊かなものにする志向をもってしています。各プロジェクトではユーザー視点の洞察と参加型デザインの方法論を導入し、異なる業種や組織、研究施設から専門家を招聘することで、ともにアイデアを提案し、ビジネスモデルを提示することを目指しています。

2014年度には、イギリスの英国王立芸術学院 (Royal College of Art, 以下RCA) のデザイン・インタラクション学科のアンソニー・ダン教授との共同研究として、ケア・ワーカーとしてのロボットをデザインするワークショップをジュリア・カセム特任教授主宰で開催しました。

このワークショップでは、社会や人間の問題に対して技術的な解決が何をもたらすか、認知症患者の予測不能な行動にいかにかロボットが対応できるか、という問いについて探求することを目的としました。そのため、参加者は機械ではなく人間として、工場ではなく日常生活において、そして単調ではなく複雑なニーズに対応して、ケア・ロボットをデザインする必要性がありました。結果的に、独居老人が過去の自分自身と出会い孤独を分かち合うための鏡型ロボット、高齢者の衰えた感覚を補いながら新しい経験を提供するウェアラブル・ロボット、DIYで製作可能な全自動の外科手術ロボットなどが提案されました。

このワークショップを契機として、RCAから招いたリーズ・ペイプ特任助教と、ものづくり教育研究センターの増田新教授がタッグを組み、ケア・ワーカーの身体的負担を軽減する研究が進められています。介護行動に要求されるデザインコンセプトを明確化し、エンジニアリングとデザインの有機的な関係を創造するという点で、D-labが大きな役割を果たした一例です。

また、2014年度は、スイス連邦工科大学チューリッヒ校 (ETHZ) のトーマス・ロイブリ上席研究員と本学の森本一成教授が実施した、介護活動や労働環境の改善を目指した共同研究や、ミュンヘン工科大学と本学デザイン学専攻が実施した、過疎化が進行する農村での農業のあり方に対するデザイン提案などを通じて、超高齢化社会や介護問題を念頭においた「人間性の再生・回復」というD-labのミッションが浮き彫りになった年でもありました。



リーズ・ペイプ特任助教(右)と増田新教授の共同研究。介護支援者の身体的負担を軽減するためのサポートウェアの開発を行っています。

つくる行為と素材の再定義

ここ20年間に起こったデザイン教育の最大の変化は、アイデア展開とその実体化におけるモデルづくりの方法論の変化だといえます。自らの手によって繰り返し行われてきたものが、コンピュータ上での作業に変貌しました。デジタル技術は、創作過程の中心に概念的思考を位置させる傾向を生む一方、実際の素材に触れることから得られる知見と本質的なヴォキャブラリー、そしてつくる行為を通して得られる問題解決能力をデザイナーから奪いつつあります。

そこでD-labでは、実践的アプローチの現代的復権を目指し、デジタル・ファブリケーション施設を中核として、多様な素材を扱い洞察と理解を試みました。この活動は、木工・金工、さらにデジタル加工をカバーしたファブリケーションスペース (D-labデザインファクトリー)、さらに紙漉きと陶器の工房の既存の施設も活用して進められています。



ウッドワーキングルームはワークショップ活動の中心的舞台です。

2014年度は、RCAと並びデザイン教育で世界的な注目を集める英国・キングストン大学との共同研究を実施しました。手作りの一品生産から、プロトタイプング、製品開発に至る関係性を問い直すことを目的とし、参加者はスケッチ、ディスカッション、ラピッド・プロトタイプング (即日制作) を集中的に経験しました。作品は展覧会形式で発表会を行い、個人的なデザインプロセスに多角的な批評を加えました。

2015年度は「再生」をテーマに、ブライトン大学と共同して繊維の廃棄物をデザイン可能な素材へと変容させる試みを行いました。このプロジェクトは先端ファイブ科学専攻の木村照夫教授とD-labのジュリア・カセム特任教授、京都府北部産業リサーチセンターが取り組む共同研究です。D-labのプロジェクトが本学内の専攻間の垣根を取り払い、産学官の結節点として機能し始めています。

批評的キュレーション

国内外を問わず、美術館はデザイン、建築、美術、そして工芸に

とって力強いリソースです。我々は本学に設置されている美術工芸資料館のリソースを生かして、より広いコミュニティとのつながりを導き出そうとしています。作品や資料の収集と管理に加え、展示と新たな批評を通じて、コレクションと作品それぞれの価値を伝達しようと試みています。

2014年度は、並木誠士教授を中心として、プリンストン大学の名誉教授であるヨシアキ・シミズ氏を特任教授として招聘し、2回の公開講座と本学の価値創造学領域を中心とする大学院生へのゼミナールを実施しました。シミズ特任教授を通じて、プリンストン大学の美術史、建築史、附属美術館などの現役教員との交流が深められた結果、2015年度以降の両校の協力関係構築へと継続しています。また、平芳幸准教授がアテンドした、ダートマス大学准教授のアレン・ホックリー氏の招聘では、本学の所蔵するポスターコレクションを用いたワークショップを実施し、収蔵品であるポスターに込められたメッセージを明らかにするよう議論が展開されました。ホックリー氏は大学附属美術館のキュレーターも務めており、価値創造学領域として共同研究をおこなう相手としても適任でした。



美術工芸資料館のポスターコレクションを活用し、ダートマス大学とのワークショップを展開しました。

おわりに

D-labの目的は、海外ユニットの「抽入」によって本学の本来有していた建築とデザインの優位性をさらに高めること、そして横断的に工学とのコラボレーションを図り、工芸 (建築・デザイン) と繊維 (工学) の機能強化を果たすことにあります。こうしたアクティビティを重ねていくことにより、世界に本学の存在が認知され、また教員・学生・事務方もグローバルなネットワークで飛躍することが期待できます。

冒頭にD-labは「実験場」と述べました。大学改革のシステムとして、また国立大学の変革の場として、そして我が国の「都市と人間の再生」の実験場として機能すること。それが使命と意識しています。

巻頭特集2 地域創生Tech Programを開設します。

京都北部・北近畿を舞台とした 課題解決型理工系人材育成プログラム

京都工芸繊維大学は、2016年4月から、グローバルな視野を持って工学・科学技術により地域の課題を解決できる国際高度専門技術者を育成するため「地域創生Tech Program」を、学部共通プログラムとして開設します。現在、私たちが地域や社会で直面している様々な課題は、限られた専門分野だけで解決できるものではありません。理工学を含めた総合的な視点で、多分野の人材が相互に協働して解決に向けて取り組んでいく必要があります。本プログラムでは、各自が工芸科学部に設置された教育プログラムによって、教養や専門基礎を身に付けます。さらに京都府北部や北近畿をフィールドとして、地域課題をテーマとした学習やインターンシップによる多様な実践的体験を積み重ねます。これらの経験を経て、各自の専門力を生かした課題解決型プロジェクトを実践することで卒業に到るプログラムです。

3つのコース

地域創生Tech Programには次の3つのコースがあります。学生はいずれかのコースに所属し、1年次から3年次前期まで各課程の学生と一緒に教育プログラムを履修するとともに、このプログラムの学生が特別に受講する地域志向科目を履修します。

コース	名関連する課程	ねらい
バイオ・材料化学コース	応用生物学課程 生体分子応用化学課程 高分子機能工学課程 物質工学課程	生物科学・生化学を基盤としたバイオ技術により、特に生物由来の材料による医薬品、食品、化粧品などのヘルス産業、繊維産業に貢献できる人材を育成する。また、物質化学を基盤とした新材料開発や複合材料開発に携わる人材を育成する。
メカトロニクス設計コース	電子システム工学課程 情報工学課程 機械工学課程 デザイン経営工学課程	ものづくり工学の基幹となる専門を基盤とし、21世紀のひとの暮らしを <small>📱</small> にする機械の開発やシステム構築、新エネルギー開発やパワーエレクトロニクスを担える人材を育成する。また、そうしたものづくりをプロデュースできる人材を育成する。
デザイン・建築コース	デザイン・建築学課程	デザインスキルを身につけ、商品・製品価値を高め、ブランド形成を具現化できる人材を育成する。また、歴史的景観や自然環境を活かしつつ、地震や風水害にも強いまちづくりを担い、そこで生活する人々の暮らしを豊かに彩るとともに、観光産業にも寄与できるデザインのできる人材を育成する。

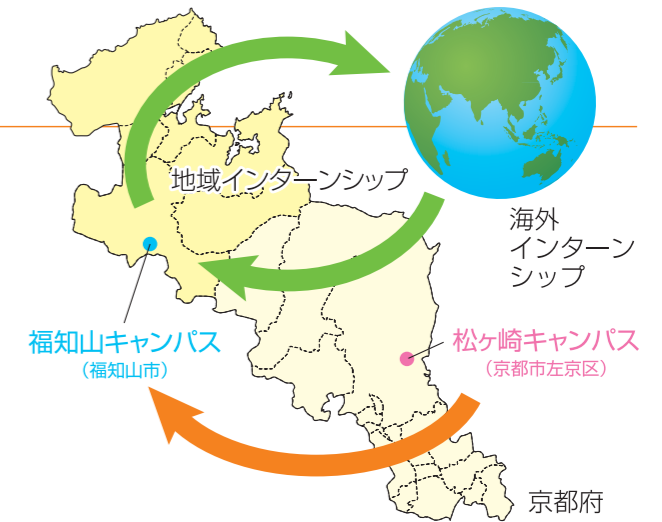
文部科学省事業採択大学

京都工芸繊維大学は文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」及び「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(大学COC事業)」に採択され、グローバル化と地域貢献の両方に取り組んでいます。



松ヶ崎キャンパスと福知山キャンパス

地域創生Tech Programでは、1年次から3年次前期までは主に京都市の松ヶ崎キャンパスで、3年次後期から4年次は福知山キャンパスで学習を行います。松ヶ崎キャンパスでは同じ課程に所属する他の学生とともに授業科目を履修し、専門基礎力を身に付けます。福知山キャンパスでは地域課題解決型学習(PBL)や地元企業・海外でのインターンシップを中心に、実践的・能動的な学習に取り組めます。



カリキュラム

年次	1年次		2年次		3年次		4年次					
	前学期	後学期	前学期	後学期	前学期	後3Q	後4Q	前1Q	前2Q	後3Q	後4Q	
地域創生Tech Program	松ヶ崎キャンパス				福知山キャンパス							
	京の伝統文化と先端(地域志向科目)【選択必修】・教養科目(三大学共同科目等)・言語科目(英語鍛上げ)				地域創生課題セミナーI(地域PBL)		地域創生課題セミナーII(理工学PBL)					
	地域課題導入PBL 基盤専門導入科目		知財系科目 アントレプレナー科目				ものづくりインターンシップI		ものづくりインターンシップII			
	バイオ・材料化学コース (応用生物、生体分子、高分子、物質工学に関する専門科目)				メカトロニクス設計コース (電子、情報工学、機械工学、デザイン経営工学に関する専門科目)		デザイン・建築コース (デザイン、建築に関する専門科目)		専門を深化させる講義・専門の幅を拡げる講義		専門の幅を拡げる講義	
					繊維・複合材料に関する講義		複合材料ものづくり実験		課題解決型プロジェクトによる卒業認定			

定員・入試日程

入学定員30名	
ダビンチ(AO)入試 ※終了しました。 募集人員：20名 (一般枠5名、地域枠12名、社会人枠3名) 出願：9月24日～10月1日 第1次選考：10月31日 最終選考：11月28・29日 最終合格発表：12月10日 地域枠：福知山市、舞鶴市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町に所在する高等学校の卒業又は卒業見込みの人が出願可	一般入試 募集人員：10名(前期8名、後期2名) 出願：1月25日～2月3日 前期試験日：2月25・26日 後期試験日：3月12日 合格発表(前期)：3月8日 合格発表(後期)：3月23日 大学入試センター試験+個別学力検査

※詳細については、学生募集要項および本学公式HPをご確認ください。

映像デザイン論

これからのデザイナーに必須の
映像リテラシーを身につけるために

〇コミュニケーション論や映像の 歴史から学ぶ

デザイン・建築学課程の課程専門科目である「映像デザイン論」を担当する池側隆之准教授は、この授業の目的について、「映像とデザインの関係性を考察し、両者の親和性の検討作業を通して、デザイナーに求められる映像リテラシーの獲得を目指すこと。」と語ります。「この授業は、デザイン・建築を問わず、造形系の学生が二回生後期から受講できる科目ですが、導入部では、言語学者のロマーノ・オシボヴィチ・ヤコブソンの図式に従ってコミュニケーションの構造を紹介し、コミュニケーションの構成要素は4つあります。互いに共有しているコンテキスト。それから伝えたいメッセージ。そのメッセージをどのように伝えるか、大きな声なのか、身振りなのか、映像なのかというコンテキスト。自分の属する文化圏の言語や慣習などのコード。映像の場合、例えばCMでは、これらの要素がどのように作用しているのかを見ていきます。こうしたことが身につくと、映像の見方も若干変わってきます。」

「また、映像の世紀と呼ばれる20世紀においては、マスメディアが果たした役割が非常に大きいので、ジャーナリズムのあり方やドキュメンタリー作品も紹介しています。不特定多数の人に情報を伝えるというマスメディアの文脈とは違った形で、現在、ドキュメンタリーが量産されています。個々人がそれぞれの視点で他者に情報発信し、その情報が共有できる状態が実現しています。在学生は、90年代以降に生まれた学生が多く、彼らはリアルタイムでこうした変化を体験していないので、まずは映像が隆盛を極めた20世紀がどのような時代であったのかをしっかりと伝え、過去を参照しながら現在を検討する視点を持たせます。」

〇映像の本質に立ち返り、 映像の可能性を問う

「一般的には『映像デザイン』というと、映像をデザインして、わかりやすさや訴求力を生み出すことを意味します。その一方で『映像によるデザイン』があり、今後、それが活発化すると考えます。そのため、授業ではその両方に触れます。」

「映像によるデザイン」とはどのようなものか、池側先生は次のように説明します。「最近10年ぐらいの間に、今日的な映像の扱い方として、例えば調査における映像の使用や、映像を介して自らのアイデアや社会の動向等を理解する手法が主にデザイン領域で行われています。リサーチ手段としての映像、思考整理のための映像です。こうした手法が使われるようになった背景として、調査研究に映像を使う人類学や民俗学の影響が挙げられます。自分の知らない文化圏に赴いて映像で記録し、それを持ち帰ったときに、自分が経験したことに加えて、映像から事後的な新たな発見をすることが可能です。さらにマーケティング分野の質的調査の文脈で、一般の



人たちにカメラを向け、人々の振る舞いを映像で記録し、その中から、新しい価値を事後的に発見していく手法が活用されています。テクノロジーが発達した現在、映像の本質である記録する機能に立ち返り、映像の可能性が捉えなおされていると言えます。」今後の映像分野の課題について、池側先生は「自分が撮影していない映像ソースの著作権の扱いが問題」と指摘します。「今までの映像の歴史のなかで膨大な映像が存在しています。それらの二次使用の問題がもう少しクリアになればよいと思います。映像素材さえあれば、自分が実体験してなくても、それを編集するなかで現場を疑似体験することが可能です。編集することで概念が浮き上がってくるわけですが、違った編集の仕方をする、また違った概念が出て来ます。そこが映像編集の面白さです。その意味で、映像の2次使用・3次使用には、大きな可能性が秘められていると思います。」

〇デザインする立場で 映像を扱うことの意味を問う

このように映像分野の新しい動向や、映像とデザインの関係に触れながら、池側先生は「さらに踏み込んで、より送り手の立場・デザインする側の立場として、映像を扱っていくことはどういったことなのか」について議論すると言います。「誰もが映像を使う状況のなかで、自分の眼以外の、代替物としてのカメラが、おそらく自分以上の経験を記録しているはずなので、そうした記録をどう読み解いて、次のデザインプロセスに必要な情報をあぶりだしていくのか。従来の映像コンテンツでは、送り手の側に伝えたい観念が先にあって、それにふさわしい素材が組み立てられ、メッセージとして放たれていくのが基本でした。しかし、むしろ観念は自分の中ではなく、社会や世界の側にあって、それをどのように映像として記録に留め、そこから新しい価値をみつけて次につなげていくのか。こういったことを考える必要があります。」

「映像デザイン論」の特色として池側先生は、「実際の映像作品を多く取り上げる点」を挙げます。「授業の1/3ぐらいは映像作品を見せる形になります。表現重視のものや、商業的なものまで、多様性を確保しながらサンプルを見せています。いずれも自分が見せたいものばかりです。作り手のサガだと思いますが、極端に言えば10分の映像作品であったとしても、心情的には思い入れのある数秒を特に共有したいために制作を行う人もいます。授業で扱うのは他人の作品ですが、作り手の感覚で、この瞬間をぜひみましょと熱く伝えていきます。そうすると学生も何か感ずるところがあるようです。」

〇自らの映像体験で得た知見を 学生に還元する

「映像分野を志望したきっかけは小学生の頃に映画『スターウォーズ』を観たことです。」と池側先生は言います。「強烈な視覚体験でした。当時は、誰もが映像を撮影できる環境ではありませんでしたが、たまたま叔父が8ミリカメラをもっていたので、比較的早く動画撮影に接する機会に恵まれました。その後、自主映画等の製作や、広告系の会社に就職して商業的な映像製作も経験しましたが、1990年代初頭に、映像にデザインという視点が入り込んできました。私はデザインと映像の関係が今後面白くなりそうだと感じ、映像の可能性をもっと研究したいという想いから、研究職に魅力を感じました。おそらく私の世代は、8ミリに象徴される旧メディアから新メディアへの移行期を、全て網羅的に体験できた世代だと思えます。そうしたバックグラウンドは、非常に大きいかと思います。古いメディアから今興ってきているメディアまでを体験した知識を、なるべく学生に還元していきたいと思っています。」



デザイン・建築学系 池側隆之准教授

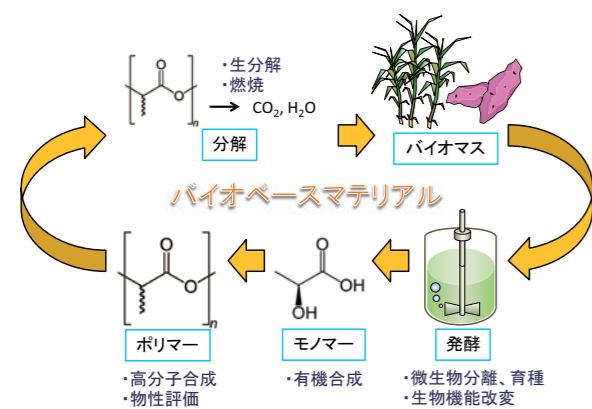
都合により、本ページは非公開です。

バイオとケミカルの垣根を超えた研究でイノベーションを目指す

微生物を使用してモノマーをつくる

「私は農学部出身で、学生時代は微生物工学を専攻していました。」と麻生祐司准教授は言います。「2010年4月、本学にバイオベースマテリアル学専攻が新設された際に着任しました。バイオベースマテリアルとは、植物資源を原料とするプラスチックと考えていただければ結構です。」

麻生先生は、自らの研究を「ポリマー（重合体）の原料となるモノマー（単量体）を、微生物を使ってつくる研究」と表現します。「ポリマーをつくるには、まず微生物を使ったバイオプロセスでモノマーをつくり、できあがったモノマーを化学プロセスによってポリマーにしていきます。つまり、二段階のプロセスとなります。私たちは、これをケミカルとバイオを組み合わせたプロセスとしてケモバイオプロセスと呼んでいます。例えば、ポリマーであるポリ乳酸をつくる際には、乳酸が原料になります。乳酸を作る方法の一つとして、乳酸菌を使う方法があります。できた乳酸を培養液から精製し、重合という化学プロセスを経て、ポリ乳酸を作り上げていきます。その過程で微生物が必要となり、そこが私の携わっている領域となります。」



カーボン・ニュートラルの機能を有する耐久消費財の開発

「これまで環境汚染との関係で、プラスチックを分解できればいいという考えがありました。ポリ乳酸の場合、生分解性があり、土に埋めると分解され水と二酸化炭素になります。その二酸化炭素が植物に吸収され、炭素固定されるこ

とで大気中の炭素の量が変化しないという、カーボン・ニュートラルが維持されます。」しかし、大きな問題があると麻生先生は指摘します。「分解されやすいということは、長持ちしにくいということです。つまり、生分解性に重きを置いてしまうと、耐久消費財としての利用が難しくなってしまいます。そこで私は、カーボン・ニュートラルの機能を有する新しい耐久消費財をつくるため、ポリビニルの原料となるビニルモノマーを微生物でつくる研究に取り組んでいます。私たちは、それをバイオビニルイノベーションと呼んでいます。」

現在のところ、ビニルモノマーをつくる微生物で工業的に発酵生産されているものは、一つだけしかない麻生先生は言います。「イタコン酸といって、アスペルギウスというカビを使って発酵生産されています。これをカビ以外の微生物を使って大量生産する研究が世界中で盛んに行われており、私たちもその研究に参加しています。私たちの研究においては、代謝工学を駆使します。代謝工学とは、微生物が持っている代謝経路を自由に改変して生産性を高める技術です。これにより、微生物本体を改良して生産性を上げ、さらに昔からの技術である発酵工学の知見を活かし、発酵条件の最適化を図ります。代謝工学と発酵工学の組み合わせで、より多くの生産を実現しようとするのが、私たちの研究の戦略です。」

新しい微生物を自然界から分離するために

麻生先生の研究は、これに留まりません。「イタコン酸の生産性を高める研究のほかに、ビニルモノマーをつくる新しい微生物を自然界から分離する方法の研究にも従事しています。イタコン酸以外にもビニルモノマーをつくる微生物がいて、その分離技術を開発しています。学生時代、恩師に『こういう微生物がいたほうがいいなと思う微生物は、既にこの世にいる。』と言われました。ただ、それを分離する手法が確立していないので、その手法を考えるわけです。よく教科書には、自然界にいる微生物の99%は分離できず、利用できているのはわずか1%であると書いてあります。しかし、こういう微生物がいればいいなと思って分離方法を考えて試してみると、分離できることが多いです。」

「私がビニルモノマーをつくる微生物を分離する方法として注目したのが、化学の発想です。ビニルモノマーは化学反応を起こしやすいので、化学の手法を使うことで目的の微生物を分離しやすくなります。私はバイオ分野の人間であり、本学に着任するまで化学には疎かったのですが、本学で化学を専門とする研究者と交流するなかで、バイオ分野の人間が考えられないようなアイデアを得られることがあります。また、本学に着任してから、化学の視点でこういうものがあればと考え、専門の知見を活かすことができるようになりました。例えば、微生物が乳酸以外にもっと面白いプラスチックの原料をつくることを、私は知っているわけです。」

既知の概念の殻を破るために必要なこと

研究室の特徴について、麻生先生は次のように語ります。「モノマーを発酵生産する研究やポリマー自体を作らせる研究は他にもありますが、その両方に着目している研究室はほとんどありません。バイオ専門の人はモノマーまでしか研究しませんし、化学専門の人はモノマーから先しか研究しないのが通常です。しかし、この研究室では両方に取り組んでいます。私たちの研究室では、バイオとケミカルの垣根を超えた研究、両側から俯瞰した研究が展開できます。」

研究室で求める人材について、麻生先生は「研究室に入った段階では全くの門外漢でもいい。」と言います。「そもそも私自身がこの大学に着任したときは、化学については門外漢でしたから。様々なバックグラウンドの学生と一緒に研究するなかで、何か新しいものが生まれて来ます。この研究室には化学を専門とする学生が多いですが、私がバイオ分野も教えていきますので、化学もできるし生物も分かるという、新しいユニークな人材が育っていきます。それが、この研究室の教育上の特色です。」

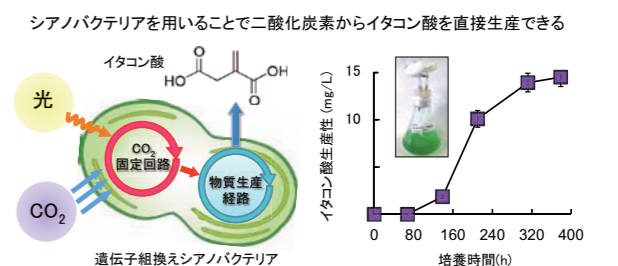
麻生先生は今後の課題について、次のように語ります。「植物は自ら生きるためにエネルギーを消費します。つまり、植物を使っている以上は、エネルギーロスが生じてしまい環境負荷はゼロにはなりません。これは私の夢物語なのですが、もし二酸化炭素を直接利用できれば、環境負荷はゼロになるのではないのでしょうか。その実現に向けて利用を考えているのは、シアノバクテリア（藍藻）です。植物のように光合成することで二酸化炭素を固定化し、糖をつくる機能をもった微生物なので、これにイタコン酸をつくる遺伝子を



繊維学系
麻生祐司准教授

入れてあげれば、直接、二酸化炭素からイタコン酸をつくることができます。実験すると、本当にイタコン酸をつくるようになりました。現状、生産性は低いのですが、将来ビニルモノマーを作る方法になるのではないかと考えています。」

「研究者は、やはりイノベーションを目指すべきだと思います。」と麻生先生は言います。「イノベーションはコロンブスの卵なのでね。言われればわかるのだけれど、言われないとわからない。既知の概念の殻を破らないといけません。今後様々なチャレンジをして、その成果を世の中にフィードバックしたいです。」



がんばる工織大生

第13回全日本学生フォーミュラ大会において、 本学チーム”Grandelfino”が準優勝しました!!

9月1日(火)～5日(土)、静岡県の小笠山総合運動公園(EO PA)において、「第13回全日本学生フォーミュラ大会」が開催され、本学学生フォーミュラ参戦プロジェクトチーム「Grandelfino(グランデルフィーノ)」が準優勝(国内チーム中では1位)を果たしました。

本大会は、学生の自主的なものづくりの総合能力を養成し、将来の自動車産業を担う人材を育てるための公益活動として、2003年にスタートしました。競技は、静的審査(コスト、プレゼンテーション、デザイン)・動的審査(走行競技、燃費等)で構成され、学生が自ら構想・設計・製作した車両により、ものづくりの総合力が競われます。今回がチーム発足から通算9度目の出場となる本学チームは、全ての審査項目の総合得点で参加86チーム中2位に入り、3年前の優勝には届かなかったものの、見事4年連続で入賞を果たしました。

そこで、大会を終えての感想や学生フォーミュラの活動とおしての所感について、稲垣祐貴プロジェクトリーダー(工学部機械システム工学課程3回生)・川端千加良副リーダー(同4回生)にお話を伺いました。

「日々プレッシャーを感じ、大会直前には食事や喉をとおりませんでした。」そう語る稲垣君は、今回リーダーとして、大会にむけてのチーム全体の進捗管理に苦労したと言います。「このプロジェクトは自発的な活動なので、強制はできません。メンバーはアルバイトやレポート提出などの用事もあり、作業の遅れがわかっている、対応しにくいメンバーもいました。」また技術面では、車検時の騒音試験のルール変更への対応が難しかったと川端君は言います。「騒音試験をクリアする為に、大会直前まで試行錯誤していました。大会本番まで騒音試験に合格できるかどうか不安でしたが、何とかクリアできました。僕たちが無事に参戦できたのは、スポンサーの皆さんや家族を含め、サポートして下さった皆さんのおかげです。」稲垣君も、「普段は、学生中心で自由に活動させてもらっていますが、トラブルが発生したときには、すかさず顧問の先生方がサポートしてくださいました。本当にありがたかったです。」と言います。

川端君と稲垣君は、いずれも高校生の頃に学生フォーミュラを知り、Grandelfinoに憧れて本学に入学しました。「オープンキャンパスで学生フォーミュラの活動を見て、このチームなら勝ると直感しました。」と川端君は言います。実際、彼が入学した年に、Grandelfinoは初の全国優勝を成し遂げました。

今回の準優勝について、川端君は次のように語ります。「今年の目標は総合3位に設定していましたが、その目標を超えることができたという嬉しさと同時に、2度目の総合優勝を成し遂げることができなかったという悔しさを感じています。」稲垣君は、「最終種目のエンデュランスが印象的でした。」と言います。「同一のコースを20周するのですが、今年は、過去2年の優勝校である名古屋大学と京都大学がリタイアしました。僕たちのチームが無事にゴールした瞬間は、胸が熱くなりました。」

これまで、海外チームの参加はアジア圏が多かったのですが、今年はオーストリアの強豪Graz University of Technologyが参戦、結局、同校が圧倒的な強さを見せて優勝しました。稲垣君は、「技術力が圧倒的に違いました。資金的には僕たちの10倍ぐらい差があると思います。」と指摘します。「しかし、スキッドパッドという種目では、タイム差がほとんどありませんでした。低予算でもいい勝負ができることを実証できました。」と川端君は胸をはります。

「大学4年間で学生フォーミュラでした。」と語る川端君は、後輩に自らの想いを託して来年3月に卒業し、トヨタ自動車に入社しますが、チームの主要メンバーの多くは大学院進学を希望しており、学生フォーミュラの活動を継続する予定です。今後の抱負について、稲垣君は次のように語ります。「まだまだ成長する余地があるので、今回の結果に満足せず、さらにも上を目指します。下級生も実力をつけており、期待できます。また、海外でも大会が開催されているのですが、参戦している日本の大学は少ないのが現状です。資金的な問題さえ解決できれば、ぜひオーストラリアやドイツで開催されている大会にも参戦し、世界を目指したいですね。」



活躍する卒業生

タカラベルmont株式会社
化粧品研究開発部

井関 鈴鹿 様

2013年3月
大学院工学科学研究科
物質工学専攻修了



アメフト部マネージャーとしての日々

私は学部生時代、アメフト部のマネージャーを務めていました。あくまでも選手が主役で、マネージャーは脇役のポジションです。しかし、選手と同じように本気で部活動に取り組みました。試合結果に一喜一憂した日々は、9割が辛いことや大変なことだったかもしれませんが、今蘇ってくるのは、不思議といい思い出ばかりです。大学院進学を入試2ヶ月前に決意し、入試の2日前まで部活の合宿に参加すると宣言して研究室の先生方に驚かれたのも、いい思い出です。自分以外の何かのために夢中になった経験は、私にとって大きな財産です。

人に感動を与える化粧品を開発する

恩師である物質工学部門(当時) 前田耕治教授には、本当にお世話になりました。大学院で修士論文を何とか書き上げ、学会発表を4回も実現できたのは、前田先生のおかげです。私は、高校時代から化粧品の開発、特に美容師さんなどが使用するプロユース化粧品の開発をしたいとの想いがあり、大学院修了後、タカラベルmont株式会社に就職しま



した。この会社は、日本の理美容業界を牽引してきた実績と、空間から商材まで幅広く提案できるノウハウを有しています。現在、私はヘアケア製品を担当しています。工織大で学んだ化学の知識は、製品のメカニズムを考案する際に非常に役立っています。最近、私が担当した製品が初めて発売されました。やりがいを強く感じるとともに、早くお客様の声を聞きたいと思っています。将来は、研究者の視点を持って、商品企画やブランド作りにも参画したいと思っています。美容業界で新しいことに挑戦し、人を笑顔にし、そして感動を与えられる化粧品を作りたいです。

後輩の皆さんへのメッセージ

工織大には、総合大学にはない魅力があります。研究室間の風通しが良く、教授陣と学生との距離がとて近いです。また、専門分野に特化した研究を行っており、工織大の研究内容はもちろん、学生に対するメーカーからの評価も、とても高いです。いい評判を作ってくださった先輩方がいることも、この大学の大きな魅力です。後輩の皆さん、大学では、やりたいことをするに限りません! 私は学部での部活動や大学院での研究活動など、充実した時間を過ごせたと思いますが、社会人になって、自由な選択肢がある大学時代がいかに恵まれ、自分にとって大切であったかを痛感しています。勉学に取り組むことは大前提ですが、自分の意思で選択・決定する自由と責任を大切にしてください。



妖怪三題

今夏に美術工芸資料館で開催した「妖怪パラダイス!—現れる異形のモノたち」展は、第4回京都・大学ミュージアム連携スタンプラリーの関連企画であったこともあり、小さな子どもからお年寄りまで多くの方に楽しんでいただくことができた。じつはこの大学、妖怪や鬼など異形のモノを描いた絵巻を数多く所蔵している。そしてその多くが、大学の前身校である京都高等工芸学校の図案科の教材としてごく初期に購入されたものである。

なかでも有名なのは、同展の目玉ともなった「百鬼夜行絵巻」(A) (AN. 3449) であろう。標本台帳によれば、原本は、室町時代に描かれた大徳寺真珠庵蔵の「百鬼夜行絵巻」(重要文化財) であり、当館の作品はその模写とされる。冒頭に「嘉永四年辛亥三月十八日寫」とあり、江戸時代末期の



「百鬼夜行絵巻」(A) 1851年、紙本着彩、1904年購入、AN. 3449

作品である。妖怪画とはいえ、繊細なタッチで描かれた淡い色合いの美しい絵巻である。残念ながら模写した人物は分からない。

百鬼夜行とは、夜が更けると異形のものたちが現れて行列をなし、京の町を跳梁跋扈するといういわば超常現象であり、遭遇すると祟りがあると京の人々に恐れられた。これをモチーフとして絵巻物が描かれるようになるのは、室町時代以降のことである。

「百鬼夜行絵巻」に描かれるのは、鬼やいわゆる付喪神たちである。付喪神とは九十九(つくも)とも書かれるように使い古された道具たちが百年たつて魂を得た姿であり、釜や五徳といった台所用品や琵琶や琴などの楽器、武具や仏具など身の周りの様々な物が、その恐ろしい現象とは裏腹にユニー

クで愛嬌のある妖怪として描かれる。絵巻の通例に反して詞書がない。

現存の「百鬼夜行絵巻」でもっとも古く有名なのは、真珠庵本であるが、じつは多くの模本、そして別系統と思われる異本が存在している。

当館にはじつは「百鬼夜行絵巻」が2点ある。いずれも作者不明であるが、内容としてはいずれも真珠庵本のヴァリエーションである。ただ真珠庵本の冒頭が、矛を担いで疾走する青鬼、大幣で白布の妖怪を追いかける赤鬼であるのに対し、Aは烏天狗、矛をかつぐ蛸入道、龍頭の亀にのった蛙から始まる点、真珠庵本の巻末が、大きな太陽が出現して夜が明け(法師が放った火の玉という説もあり) 妖怪たちが逃げ惑う様であるのに対し、Aではそのあとに闇のなかでうごめく

鬼たちの様子が描かれている点などが相違する。この構成は、真珠庵本系統のなかでも東京国立博物館本Aと呼ばれる作品に近い。全体的に色が淡く、器物の妖怪が大半を占める真珠庵本に比べて、鬼や狐、猿、鳥、蛙といった動物の妖怪が多くみられる。一方、今回展示会に出品しなかった「百鬼夜行絵巻」(B) (AN.3523) は、若干の順序の違い、2匹の妖怪が描き損じられていることを除けば、描かれている妖怪は真珠庵本とほぼ一致する。色味の濃さも近いが、Aに比べると手がおちるようだ。

さて、つぎに紹介したいのが、「異行加茂祭」(AN.3494) である。復古やまと絵の作家、田中訥言(1767-1823) が描いたと伝わるが、定かではない。訥言は、平安時代のやまと絵を復興させた人物として著名であるが、その技法をまなぶた

め、古典的な作品を多く模写したことで知られる。

「異行加茂祭」はその名の示すとおり、上賀茂神社と下鴨神社で春におこなわれる賀茂の祭の行列の様子を主として動物の妖怪に見立てて描いたものである。「文永賀茂祭草子」や「年中行事絵巻」などがベースになっていると考えられるが、「百鬼夜行絵巻」の図様とも関係性が深い。

明治時代初期に編纂された絵画目録ともいえる『考古画譜』には、妙法院の依頼で訥言が「異形賀茂祭図巻」を描いたことが書かれており、この絵巻は現在、出光美術館の所蔵品とされている。当館所蔵の「異行加茂祭」を出光美術館蔵本と比べると、紙継ぎの関係で描かれた妖怪の間隔が多少ずれているものの、抜けている図様もなく、各妖怪のポーズもかなり正確に写されている。ただそのあまりにあっさりとし



「宮中百化図」江戸時代、絹本着彩、1905年購入、AN.3457

た表現から、いずれも訥言のオリジナル作品と断定することには、やや抵抗を感じる。

最後に、同じく田中訥言筆と伝わる当館自慢の一品、「宮中百化図」(AN.3457) を紹介したい。宮中にいる貴族の様子を揶揄するように妖怪に見立てて描いた作品で、現段階では、類品がない。『考古画譜』にも掲載されておらず、角川書店『絵巻物総覧』(1995年) にも収録されていない。

当館所蔵の絵巻としては珍しく絹本着彩であり、ところどころに金泥が使われるなど立派な造りである。精緻なタッチで背景描写も含め非常に丁寧に描かれる。本紙に年記はなく、巻末に「應需(※注文制作の意) 訥言」と記されている。さらにそのしたに、白文方印で「田中之印」、朱文方印で「訥言」とあるが、同じような落款は、これまでの訥言の作品では

見受けられず、現時点で訥言の筆とすることは難しい。

霧のかかった屋敷の様子から画面は始まる。紫色の爬虫類のような老女が、異形の姫にお茶をささげ持って現れる。杉戸の向こうからは巨頭の妖怪が顔を出し、屋敷の主人の前で絵を披露する絵師の手元を傍らの首の長い僧侶が覗き込む。そばには提灯をもった狐の女童。隣では女の幽霊が飛び回り、画中で唯一の人間たちが腰を抜かしている。屋敷のそばの川からは二頭身の妖怪が屋敷のなかを覗き込み、屋敷のなかからは首長女が首をのぼして川の水を飲んでいる。その様子を遠くの方からうつろな瞳で見つめる焼けただれた女の妖怪。かつて屋敷にいた女官のなれの果てであろうか。一見華やかにみえる宮中の暮らしが、じつはおぞましい妖怪に憑りつかれた世界であることを物語っているようである。

京都高等工芸学校が開校初期から戦前にかけて購入した模写を中心とする絵巻は、古典的な著名な作品を中心に数多い。しかし、著名な作品にまじってこうした妖怪画のような個性あふれる作品が購入されていたことは、特筆すべき事柄であり、おそらく、当時大津絵や戯画的な日本画に傾倒しつつあった浅井の好みも反映されていると考えられる。実に面白い妖怪三題。できれば、また新たな展示の機会を設けたい。

◆参考文献

田中貴子、花田清輝、澁澤龍彦、小松和彦『図説 百鬼夜行絵巻をよむ』河出書房新社、1999年
『尾張のやまと絵 田中訥言』名古屋城、2006年
(美術工芸資料館 和田積希)

平成27年11月4日

国際学生EV超小型モビリティデザインコンテスト2015において、 京都工芸繊維大学のチームが最優秀賞を獲得しました

平成27年10月29日(木)～11月8日(日)にかけて開催された第44回東京モーターショーの会場にて、11月4日、「国際学生EV超小型モビリティデザインコンテスト2015」の表彰式が行われ、本学デザイン経営工学課程およびデザイン・建築学課程所属学生によるチーム「Nasawopolus」が、最優秀賞に輝きました。

同コンテストは、一般社団法人 電気自動車普及協会が主催し、1. 自動車よりコンパクトで小回りが利き、環境性能に優れ、地域の手軽な移動の足となる1人～2人乗り程度の車両
2. 導入・普及により、CO2の削減のみならず、観光・地域振興、都市や地域の新たな交通手段、高齢者や子育て世代の移動支援等の多くの副次的便益が期待される 超小型モビリティのデザインアイデアを募集したものです。

当日は海外からの応募者も含めた全98チーム中2度の審査

を通過した6チームが、表彰式にて審査員の前でプレゼンテーションを行いました。本学のチーム「Nasawopolus」は、「E-Mobilis」という家具のようにふるまうモビリティによって実現される新しい暮らしを提案、見事に最優秀賞を勝ち取りました。



「Nasawopolus」のメンバーで記念撮影

COC+事業は、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革に取り組む大学を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とするものです。

本学は、平成25年度から大学COC事業(事業名: 京都の産業・文化芸術拠点形成とK16プロジェクト/事業期間(予定): 平成29年度まで/取組内容: COC事業特設サイト)を舞鶴工業高等専門学校と共同で実施するなど、京都府北部の自治体・企業等との様々な連携・関係を構築し、地域での取組が成果としてかたちになりつつあります。これらの蓄積をもとに京都府の中で特に人口流出が進む北京都(府北部・中部地域)を中心として、本学が福知山市に開校予定の福知山キャンパスを拠点に、京都府全体の地域創生を担う人材育成を府内の国公私立大学・高専、自治体、企業等との連携により推進する取組が、COC+事業に採択されました。

事業開始は平成27年10月、事業期間は平成27年度から31年度までの5年間の予定です。

- ◆事業名称:
北京都を中心とする国公私・高専連携による京都創生人材育成事業
- ◆事業協働機関:
(参加大学・高専)
京都府立大学、京都学園大学、舞鶴工業高等専門学校
(参加自治体)
京都府
(参加企業等)
公益社団法人京都工業会、丹後機械工業協同組合、福知山商工会議所、舞鶴商工会議所、綾部商工会議所、宮津商工会議所、亀岡商工会議所、特定非営利活動法人グローバル人材開発センター、一般社団法人京都府北部地域・大学連携機構

平成27年10月26日～30日

「International Week 2015」を開催しました

本学は平成27年10月26日(月)から30日(金)にかけて、大学の国際化推進や国際交流活動の紹介のため、「International Week 2015」を開催しました。

「International Week」は昨年・一昨年に続き、今年で3回目の開催となり、様々なプログラムを実施しました。「Bibliobattle in English」では、計9名の学生が英語で自分の好きな書籍についての紹介を行い、英語でのプレゼンテーション能力の向上を図りました。グローバルインターンシップ報告会では、冒頭で文部科学省高等教育局学生・留学生課 木谷慎一係長にご講演いただいたのち、同プログラムに参加した学生が自らの経験を英語でプレゼンテーションしました。その後、本学教員および協定校であるケルン応用科学大学のJochen Siegemund 教授が、ジュリーとして学生と活発な質疑応答を繰り広げました。

今回のインターナショナルウィークでは、海外からも多くのゲストを招待しました。学長主催KIT国際交流のタペには、タイ

の協定校から3大学、ベトナムの協定校から3大学の学長、副学長を招待し、今後の交流について意見交換がなされました。また、2日間に渡って開催された第13回Japan-Vietnam Joint Seminar(日越セミナー)では、ベトナムの5つの大学・機関、タイの1機関の研究者にそれぞれの研究分野についてのプレゼンテーションをお願いしました。

今回の「International Week 2015」をとおして、多くの学生・教職員の参加がみられ、学生らの海外留学に対する意識の高さが伺えました。また、今後の国際化戦略について教員間での意見交換も進み、大変有意義な1週間となりました。



キックオフパーティーにて記念撮影

平成27年9月12日

職員が100Kmマラソンの世界選手権で 日本人女子トップの成績をおさめました

本学研究推進課の職員、太田 美紀子さんが、平成27年9月12日に開催されたIAU100Km 世界選手権オランダ大会(IAU 100Km World Championships 2015)において日本人女子トップ(全体73人中13位)の成績を収め、同時開催の世界マスタースターズ Women40クラスでは銅メダルを獲得しました。

太田さんは、本学に採用されてからマラソンを始め、本学職員らで構成されているマラソンチームのメンバーとともに日々トレーニングに励んでいます。平成27年6月28日に開催された「第30回サロマ湖100Kmウルトラマラソン」において4位入賞を果たし、今回のIAU 100Km 世界選手権オランダ大会の日本代表選手の一人となりました。これまでに、2010・2012年大会の2回、日本代表選手として世界選手権に出場しています

が、以前は6名だった派遣選手が現在は4名に厳選されており、代表権争いが激化する中で日本代表の座を獲得しました。

日本代表選手女子チーム4番手の選手として今大会に出場した太田さんは、実績のある選手らが本来の力を発揮できない中、自己ベストを5分以上短縮する7時間52分39秒という見事なタイムでゴールまで走り抜き、世界選手権において日本人女子トップでゴールするという偉業を成し遂げました。



日本人女子トップでゴール

平成27年7月14日

本学学生の作品が全国高等学校駅伝競走大会の 公式ロゴに選ばれました

平成27年7月14日、本学大学院生のウォルン エミリー麗さん(デザイン学専攻修士2回生)の作品が、全国高等学校駅伝競走大会の公式ロゴに決定しました。

昭和25(西暦1950)年に始まった全国高等学校駅伝競走大会は、今年12月の大会が京都に開催地を移してから50年の節目となることから、記念事業として、公式ロゴを府内の大学生・大学院生を対象とした公募により決定することとし、平成27年

4月～5月に募集を行っていました。

厳正なる選考の結果、ウォルンさんの作品が見事「最優秀賞」を受賞し、今後は大会ポスター、パンフレットなどで幅広く使用される予定です。

全国高校駅伝



公式ロゴに決定したウォルンさんの作品

全国高校駅伝

平成27年9月28日

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」 に採択されました

本学が申請した取組が、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択されました。

文部科学省では、平成 25 年度から「地域のための大学」として、地域再生・活性化の拠点となる大学を支援する「地(知)

の拠点整備事業(大学 COC事業)」を実施しています。本年度からは、大学COC事業を発展させ、事業を加えるかたちで「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」を実施することとし、公募が行われました。

■ 学部

入試種別	募集要項 配付開始	出願受付期間	試験実施日	合格者発表	備考
一般入試	配布中	1月25日(月)～2月3日(水)	前期:2月25日(木)・26日(金) 後期:3月12日(土)・13日(日)	前期:3月 8日(火) 後期:3月23日(水)	

■ 大学院

入試種別	募集要項 配付開始	出願受付期間	試験実施日	合格者発表	備考
前期課程 一般(学部3年次含む)	配布中	第Ⅲ期 資格認定申請締切 12月1日(火) 1月6日(水)～1月13日(水)	2月4日(木)	2月17日(水)	
前期課程 社会人		第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月1日(火) 1月6日(水)～1月13日(水)	2月4日(木)	2月17日(水)	
前期課程 外国人		資格認定申請締切 12月1日(火) 1月6日(水)～1月13日(水)	2月4日(木)	2月17日(水)	
後期課程 一般・社会人		第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月1日(火) 1月6日(水)～1月13日(水)	2月4日(木)	2月17日(水)	
後期課程 外国人		資格認定申請締切 12月1日(火) 1月6日(水)～1月13日(水)	2月4日(木)	2月17日(水)	

※実施する専攻については、配付中の各募集要項にて確認してください

12月以降の主なイベント 学内・学外を問わず参加いただけるイベント等のご案内です。 詳細は、それぞれの問い合わせ先へお気軽にお尋ねください。

開催日	イベント	参加費 (有料・無料)	参加申込の必要	問い合わせ先	会場
1月8日(金)	第29回長もちの研究会	参加費 (4000円、書籍代含む)	有	長もちの科学研究センター Tel: 075-724-7310	松ヶ崎キャンパス ベンチャーラボラトリー 1Fラウンジ
1月29日(金)	機器分析センター市民講座・先端技術講座 「最先端技術でものを観る」	無料	有	研究推進課総務係 Tel: 075-724-7038 Fax: 075-724-7030 E-mail: ken-apply@jim.kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス
3月25日(金)	学位記授与式			総務課総務係 Tel: 075-724-7014	松ヶ崎キャンパス
3月28日(月)	プラズマ制御科学研究センター 2015年度第2回研究会	無料	有	プラズマ制御科学研究センター 林康明 教授 Tel: 075-724-7415 E-mail: hayashiy@kit.ac.jp	工織会館多目的室

美術工芸資料館展覧会

開催期間	展覧会名
平成28年3月～5月(予定)	サントリーコレクションポスター展
平成28年3月～5月(予定)	第14回村野藤吾建築設計図展

大学公式SNS

国立大学法人
京都工芸繊維大学
<https://www.facebook.com/KIT.Kyoto>

国立大学法人
京都工芸繊維大学
@pr_kit

国立大学法人
京都工芸繊維大学
@k-it

※日々更新中です。是非ご覧ください。



編集・発行 京都工芸繊維大学広報委員会
〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町
TEL (075) 724-7016 FAX (075) 724-7029
ホームページ <http://www.kit.ac.jp/>

表紙デザイン: 中野デザイン研究室 撮影場所: 中央門
写真のコンセプト: 美しく交差し合う幾何学形態は、本校の正門の一部をトリミングしたものです。
毎日見ているものでもクローズアップして、一部を切り取ってみれば、
普段は気づかない美しさに気づくことができます。